

近年のサンマ漁獲状況及び漁場形成

福島県水産試験場 海洋漁業部

部門名 水産業—資源管理—サンマ

担当者 池川正人

I 新技術の解説

1 要旨

近年サンマの水揚げ量が減少傾向となっていることから、1997～2017年における本県所属船の操業日誌(最大5隻分)について解析し、月別の操業位置及び獲れ具合(CPUE:トン/入網回)等を整理した。

1997～2017年において航海状況、操業状況に大きな変化はなかったが、近年は1998～1999年以来の不漁であることが示された。また、8～10月における漁場がおおむね東経145度以東と遠くになっており、これは1998～1999年にはなかった現象であった。

- (1) 1997～2017年において、1隻当たりの航海数、航海日数、操業数、操業日数は大きな変化はなかったが、漁獲量、獲れ具合をみると、1998～1999年は不漁、その後徐々に上向き2008年をピークとした豊漁傾向で推移したが、2015～2017年は再び不漁となったことが示された(図1)。
- (2) 月別の漁場位置について解析した結果、2014年までは8～10月に道東、三陸沿岸、11～12月に三陸、常磐沿岸に漁場が形成されていたが(図2-1:不漁年、図2-2:豊漁年)、2015年以降、11～12月は沿岸に漁場が形成されたものの、8～10月は沖合域になる傾向がみられた(図2-3)。
- (3) 2015～2016年は道東沿岸に暖水塊が発生しておりサンマの来遊を妨げたことが考えられたが、2017年においては親潮系冷水が道東沿岸に波及しており(図3-1、3-2)、沖合での漁場形成は海況が原因ではなかったものと思われた。

2 期待される効果

不漁傾向が続いている中、漁場が沖合に形成されることから、操業コストが上昇していることが考えられる。サンマの操業支援に関する施策に向けた基礎資料となる。

3 適用範囲

行政機関、研究機関、漁業関係団体

4 普及上の留意点

引き続き、漁獲状況についての把握が必要である。また、国立研究開発法人水産研究・教育機構、一般社団法人漁業情報サービスセンター等に対し、これまで以上のきめ細やかな漁況予報及び情報を求めていく必要がある。

II 具体的データ等

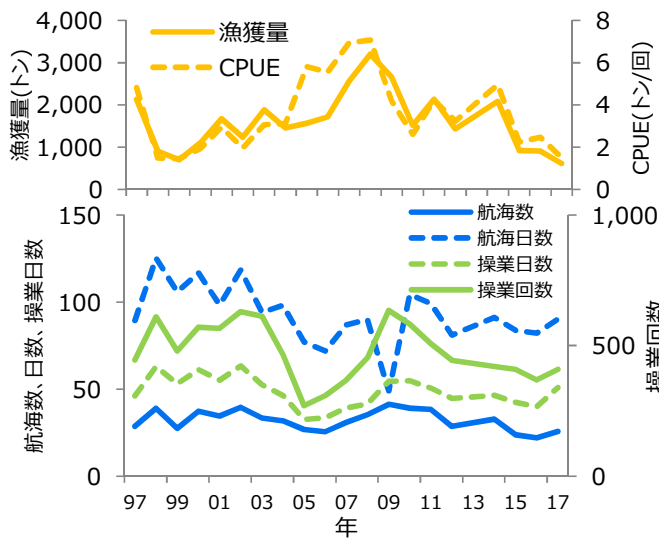


図1 1隻当たりの漁獲、航海、操業状況

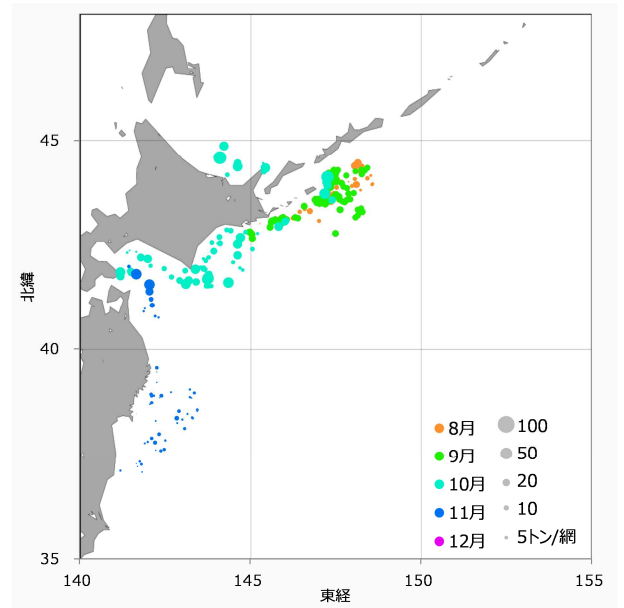


図2-1 月別漁場位置及びCPUE(1999年)

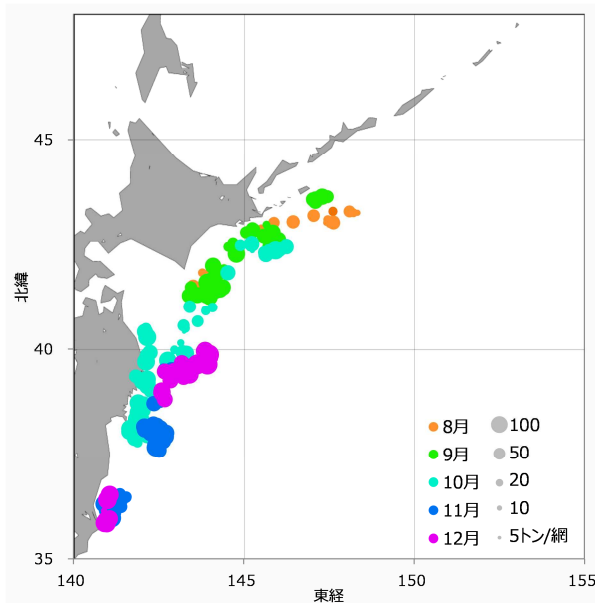


図2-2 月別漁場位置及びCPUE(2008年)

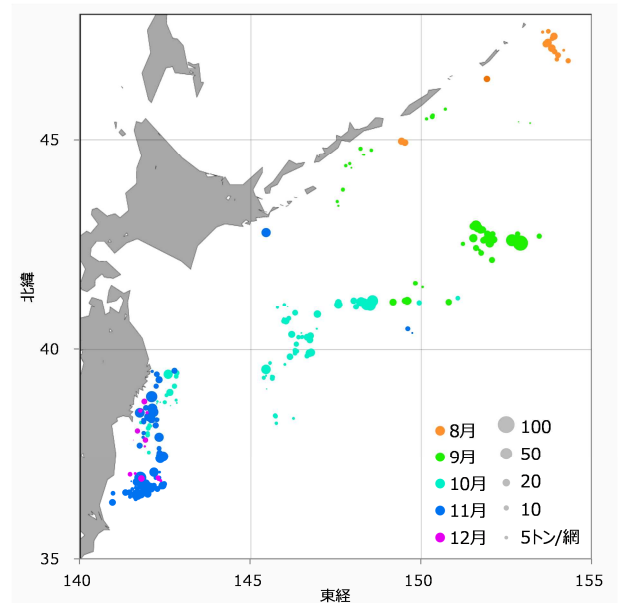


図2-3 月別漁場位置及びCPUE(2017年)

III その他

1 執筆者 池川正人

2 成果を得た課題名

- (1) 研究期間 平成9年度～29年度
- (2) 研究課題名 浮魚類の持続的利用に関する研究

3 主な参考文献・資料

国立研究開発法人水産研究・教育機構：太平洋および我が国周辺の海況予測システム(FRA-ROMS)

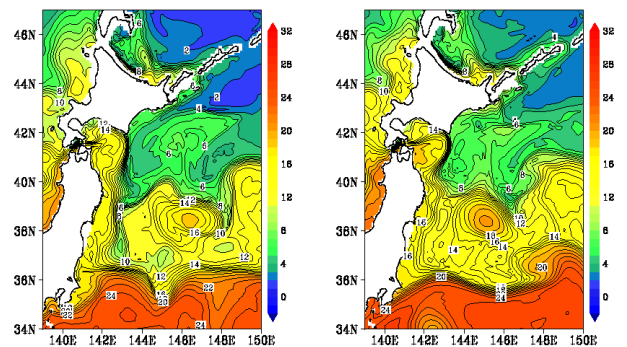


図3-1 50m 深水温 (2017年9月)

図3-2 50m 深水温 (2017年10月)